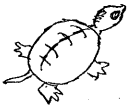
幼児期の重要性

キャロリン・A・チャンドラー



キャロリン・A・チャンドラー博士は、メリーランド州、ベセスダにあるU・S・保健、教育、福祉機構の、米国精神衛生研究所、地域社会事業部、地域社会精神衛生相談員である。

この人工衛星が打ち上げられるような宇宙時代には、精神衛生や教育にたずさわる私どもは明らかに、現代の危機に直面している。超ロケット弾からスーパーマンに至るすべてのものをできる限りの早さで生産しなければならないという圧力が非常に大きい時代である。こういう時にあって、何か技術的なくふうをすれば成長や発達の過程までもスピードアップすることができるという考えは非常に危険であり、またその説が幼児期の子どもに適用されるならば、ますます危険である。

幼児期はそれにつづく児童期から老年に至るまでの長い期間にわたって影響を与えるので非常に重要な時期である。幼年期の初期に成熟と学習という二つの過程を経て人間は成長していく。学習はその子どものまわりにある物や人によって促進されるが、成熟への発達段階は短縮されたり、とばされたりすることはできない。個々の子どもによって発達の速度には違いはあるが、子どもは皆同じ型の発達過程を通るのである。これは知能ばかりでなく、身体的、情緒的発達、あるいは人格の発達についても同じことがいえるのである。

成熟と学習

赤ん坊は立つ前にすわり、歩く前にはい、話す前に歩くことができるようになる。「手におえない二歳児」はやがて「信頼できる三歳児」になり、それがまた「いらいらすることの多い四歳児」として育ち、やがて「かわいい魅力的な五歳児」へと成長するのである。このような発達の過程において、それぞれの段階はその前の段階の上に築かれるのである。子どものその後の発達に対す

るレディネスは、その前の段階に成功したかどうかに大きくかかっている。もしこの事実を無視するならば、両親や教師の側には不安やつまずきをひき起こし、子どもの側には失敗感を抱かせることになる。

子どもは成熟と学習によって成長する。子どものよろこびは子どもとなることである。子どもが子どもになるためには、その子どもに成長するための時間が必要である。おとながそれに気がつかず早く期待をかけすぎると失敗する。子どもをそれぞれ個人のペースに従って育てようと思っている理解のある寛容な両親や教師でさえも、子どもが夢や空想にふける時間を与えることを忘れている。おとなは子どもが次の段階に前進することができるときに、それをひきとめたり、時期がきていないのに、無理に次の段階に押し出そうとしたりすべきではないことをよく知っている。けれどもこのように理解のあるおとなでさえも、子どもを成長させようということだけを一生懸命考えて、子どもの楽しみを保護してやることを見落としてしまうのである。

雑誌や書物、パンフレットなどに、幼児期の子どもに必要なことについて、すでに多くのことが書かれているので、それをくりかえして述べるのは陳腐なことになるかもしれない。しかし、若い科学者、若い技術者、若い立法官、若い行政官を早期に育成しようという圧力が高まっている今日、すでにいいふるされた真理についてあえて新たに述べることも意味があるであろう。

愛情、受容、承認、適応能力

すべての子どもは愛情と受容、承認を欲している。赤ん坊は愛されることによってのみ生存し、また成長するのである。私どもは母親の愛情に欠けた赤ん坊は、身体的にも知能的にも情緒的にも発達がおくれ、また発育不能となり、死さえも招くことがあることを研究によって知っている。またその反対に、あたたかい母親の愛情のなかで育つ子どもは標準よりずっと上回った早さで成長することも研究を通して知らされている。

その子どもが独自的なひとりの人間として受けいれられるということは、その子どもの健全な発達に絶対に必要なことである。その子どもの髪が金髪であれ、褐色であれ、また背が高くても低くても、やせていてもふとっていても、そのままに受けいれられることが必要なのである。それによってその子どもは、自分はまわりのおとなにとってたいせつなひとりの人間だということを自覚して成長するのである。子どもが成長したときに自分自身をどうみるかということは、成長期におとなから重要さを認められたかどうかということによるところが大きい。いいかえれば、おとなとして私どもがもっている自信と自尊心は、子ども時代にわれわれが尊敬されて扱われることによって作られたものなのである。

承認ということはいろいろの意味に解することができる。ある親は承認するということは完全に子どもに表現の自由を与えることだといい、ある人は承認に価することだけにとどめるべきだと

考える。またある人は、何を認めるか認めないかも判断できず、あいまいな矛盾の中にいる。承認ということはこのいずれでもない。承認とは受容よりも一歩先のことである。受けいれることは子どもをそのままに、その子どもであるという状態で受けいれることである。それに対して承認するということは、その子どもが何かをする過程を認めるのである。

もし子どもが、幼児期に、愛情の中で育ち、受容され、承認されて成長するならば、その子どもは第四の段階に達することができる。すなわち、最も大切な発達段階である適応する能力を得ることができるのである。

適応することは生きることであり成長することである

現代の動きの早い核時代において、人間と環境との戦いは、私ども人間の生命の歴史と同じように古くからあったことを思い起こしてみるとよい。この長年にわたる戦いに、人類はすでに勝ったともいえないし負けたともいえない。むしろ人間とその環境の間に平衡状態がつくられたといえよう。この平衡状態は人間が環境に適応することによって生まれたのである。それがなくしては私どもは生存することはできなかったであろう。このような現在のジレンマにあって、私どもが現在の急速に変化する環境と平衡を保っていくためには、適応の過程にたよるほかはないのである。適応できないということは死滅することである。適応するということは生きることであり成長することである。

☆もし子どもが最初に愛され、また承認されながら育ったならば、彼は精神的にもよく成長し他の人々に愛と承認を与えることができるようになる。もし私どもが承認するということが子どもに制限を与えないことであると考えるならばそれは危険なことである。子どもを愛するということは彼のしたいことを何でもゆるすということではない。制限しないことは危険であり、制限しないことが愛ではない。しかし制限するということは良い悪いという判断を下すことではない。私どもは三歳児が他の子どもを傷つけたとしても悪い子だといわないし、そうしないからよい子だとはいわない。私どもがいかにその子どもを愛し関心をもっているかということや、また彼をひとりの人格として考えるゆえに、あるときには「ノー」といわなければならないのだということを、彼に感じさせるように導くのである。語られる言葉でなく、おとなと子どもとの関係が大切なのである。なぜなら子どもはおとなに守られて安全であることを感じ、またおとなを信頼することを学ぶことが大切だからである。私どもは四歳の子どもに「彼が利己主義である」とか「よくわけあうか」とか、あるいは「親切で友好的である」などという必要はない。もし子どもが、おとながいつも自分とわけあっていることを感じ、また彼自身の経験がそういう方面で満足していたならば、彼もまた他の人と同じように建設的な関係をもちたいと思うであろう。そして快く人に与えまたわけあうであろう。それは彼にとって楽しいからである。他の子どもが喜んでくれるものを何ももっていないと思っている子どもは、健全な精神をもたない失われた小さな魂である。――スー・テリー・ウッドソン　（北陸学院短期大学・南　信子訳）